

2009年4月30日

テレビ番組を制作されている皆様

コウモリの会
会長 山本輝正

コウモリに関する撮影・放映時におけるお願い事項について

わたしたち「コウモリの会」は、コウモリ類の研究と保護、そしてコウモリに対する偏見をなくしコウモリに対する科学的知識の普及を目指した活動をしている団体です。(別紙参照)

コウモリについては、誤解に基づいたマイナスイメージを持っている人が多いのが現状です。すばらしい映像によって、その誤解が解けることも多々ありますが、撮影方法に問題があり、生息場所の放棄や、生息数の減少につながってしまう例もあります。また、従来のイメージに基づいたコウモリ観そのまま、誤解を増幅させかねないこともあります。

コウモリについて撮影、放映する場合、特に気をつけていただきたい点をまとめましたので、どうかご留意いただきたいと思います。

1 基本的事項の間違い

コウモリに限らず、野生動物全般に当てはまる事柄ですが、特にコウモリについては、鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律の対象になっているという意識がなかったり、多様な種がいることの理解がされていなかったりするため、基本的な事柄の間違いが多くなっています。

1-1 捕獲について

日本のコウモリは、すべて鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律の対象となっています。そのため、捕獲する場合は許可が必要となります。通常この許可は研究目的に限られます。捕獲許可を得ている研究者に同行して撮影する場合などを除き、一時的であっても、野生のコウモリをつかまえて撮影することはできません。

1-2 種の誤認

日本には現在35種のコウモリがいて、ねぐらの場所や食べ物などは、種に

よって様々です。超音波をつかって昆虫を狩り洞窟で眠る、といった一般的なコウモリのイメージに当てはまらない種も多いので充分気をつける必要があります。(別紙*1参照)

事例1 家屋内にアブラコウモリがいるという場面を再現するため、動物プロダクションから借りてきたまったく別種の外国産コウモリを利用して撮影していた例があります。このとき利用したコウモリは科も違うコウモリだったため、タヌキとライオンを混同しているようなものでした。

1-3 生息数の増減に関する言及

よく、都会でコウモリ(アブラコウモリ)が増えているというコメントがされますが、そのような確実な報告はないので、気をつける必要があります。野生動物の場合、ある区域で一時的に増加しているように見えても、もっと広い地域全体で見れば、減少していることもよくあります。

1-4 希少種としての扱い

コウモリの仲間は、レッドリストに掲載される種の割合が多くなっています。(別紙*2参照)

最近でこそ、検疫期間が長くなったために外国産のコウモリをペットとして輸入することはほとんどなくなりましたが、かつては、珍しいペットとしてもてはやような放映がされることもありました。これなどは、原産地での捕獲を助長することになりかねないので、注意が必要です。

また、海外での珍しい食べ物としてコウモリの料理が紹介されることがありますが、希少種である場合も多くあります。現地の人たちが年に数回コウモリを食べている分には問題はなくても、観光客が興味本位で食べるようになると、捕獲数が増大し、絶滅に手を貸すことにつながります。これは、結果的に現地の人々の食文化をも途絶えさせることにつながってしまいますので、充分ご注意ください。

事例2 グアム島のマリアナオオコウモリは、地元のチャモロの人たちがお祭りの際などで食べるものでしたが、主に日本からの観光客が興味本位で食べるようになったこともあり、絶滅寸前にまでなりました。そのため、今度は太平洋じゅうの島々からオオコウモリを輸入するようになり、それらの島々でも数を大きく減らしました。

2 撮影時の問題点

コウモリは冬眠(別紙*3参照)をしたり、集団で繁殖したり、他の野生哺乳類とは異なった生態を持っているため、撮影時にも特別な配慮が必要になっ

できます。特に洞窟など、日中コウモリが休息している「ねぐら」内での撮影には、十分な配慮が必要です。どうしても内部の映像が必要な場合は、●撮影には赤外線カメラ、暗視カメラや CCD カメラを使い、コウモリに強い可視光をあてない●入洞時間および撮影時間は必要最小限にする●入洞する人数を限定するなどの慎重な気遣いが必要です。

以下、撮影時期による注意点を記します。

2-1 冬眠期の撮影

多くのコウモリは冬眠をしますが、この期間は活動のエネルギーを節約するために、体温を下げたり、呼吸数や心拍数が極端に下がったりします。この間に、撮影などによって強制的に覚醒させてしまうと、蓄えていたエネルギーを余計に消費してしまい、蓄えていた脂肪が春まで保たなくなり、死亡することにつながります。冬期間コウモリのいる洞窟内に入るなど、冬眠を阻害する事は絶対に避けてください。どうしても撮影が必要な場合は、春先、暖かい日にはコウモリが採餌に出かけられるような時期に、十分注意して行ってください。

なお、コウモリがじっとしていて影響を与えていないかのように見えることがあります。冬眠から覚醒するには相当の時間を要し、それまでは動くことができません。決して「気にしていない」わけではありません。

2-2 出産哺育期の撮影

冬眠期と同様、出産哺育期も大きな影響を与えてしまう時期です。出産哺育用の洞窟に入ることによって、早産、あるいはその洞窟の放棄につながる可能性があります。集団で出産哺育をする種も多いため、1カ所で影響を与えると、その種の絶滅につながる恐れもあります。出産哺育中の洞窟での撮影は絶対に避けてください。どうしても撮影の必要がある場合は、哺育期後期の夜間、母親が出洞したあとに十分注意して、短時間で行ってください。

2-3 その他の時期やねぐら以外での撮影

冬眠期以外でも、昼間、体温を下げてエネルギーを温存することがあります。また、ねぐら場所を変えてしまう可能性もあるので、極力ねぐらは攪乱しないようにしてください。

ねぐら以外の場所でも、撮影用のライトは強力なものは使わずに、赤色ライトを利用したり、高感度カメラを利用することで、対応してください。また、極力人数を少なくし、近付きすぎないようにしてください。

事例3 ニュース番組で、洞窟内にレポーターやテレビカメラが入り、混乱したコウモリが飛び交っている状況をレポーターが「襲撃された」と言っている

る場面がありました。これなどは、コウモリの側がねぐらを「襲撃」されている状況でした。

3 コウモリ＝怖い動物という先入観に基づく放映

確かに現在の日本人のコウモリに対するイメージは、あまりいいものではありません。これは、西洋文明と共に魔女伝説や吸血鬼のイメージがそのまま入ってきたここ100年くらいの事で、それまではコウモリは特にイメージの悪い生きものではありませんでした。むしろコウモリを吉祥（幸運の象徴）とする中国の影響もあっていいイメージの動物でした。

ぜひ、このような誤解に基づいたイメージに引きずられることなく、野生哺乳類の一つとして、公平な観点で放映していただきたいと思います。都会にも住むアブラコウモリや沖縄のクビワオオコウモリなど、都市に住む住民にとっては、いちばん身近な野生哺乳類です。人間と野生動物の関係を考える上でもいちばんいい材料だと思いますので、ぜひご配慮ください。

4 問い合わせ等

コウモリに関する疑問点や、撮影方法のご相談など、どうぞお気軽にお問い合わせください。役員等、皆ボランティアでの活動なので対応に限界はありますが、コウモリに対する旧来の悪いイメージを向上させる事につながるものでしたら、喜んでお手伝いさせていただきます。

別紙 コウモリに関する基本的な事項

* 1 コウモリの多様性について

コウモリは世界におよそ1100種、哺乳類のおよそ5分の1はコウモリです。翼を持ち、夜間、空を飛ぶことができるという点は共通していますが、多種多様に分化をしています。超音波をつかってまわりを「見る」事のできる種も多いですが、まったく超音波はつかわずに、大きな目で有視界飛行をする仲間もいます。食べ物も昆虫食の種が多いですが、魚やカエルなどを食べる種、果実や花蜜を主食とする種など様々です。また、コウモリというと洞窟をねぐらとするイメージがありますが、樹洞を利用したり、家屋などの建物を利用したり、樹上でそのまま寝ている種など洞窟以外をねぐらにする種も多くいます。

* 2 コウモリの希少性について

日本のコウモリ37種のうち、すでに2種が絶滅し、それ以外にも25種が何らかの形で環境省版レッドリストに掲載されています。哺乳類全体と比べても、コウモリの掲載される割合は高くなっています。世界的に見ても、生息状況や生態がわからないまま、絶滅の危機を迎えている種が数多くあります。また、ある程度数の多い種であっても、実際に冬眠や繁殖をしている場所は数少ないこともあり、1カ所が何らかの原因でなくなってしまうと、すぐに絶滅の危機に瀕する場合があります。

* 3 冬眠について

冬眠をするコウモリの場合、秋に脂肪を蓄え、冬期間は体温を外気温近くまで下げて、呼吸や心拍も落とし、エネルギーを極力節約して冬を越します。生後1年未満の個体は、蓄えた脂肪が少なく、通常でも生き残れないことがあるといわれています。そのような状況の中で、冬眠時に強制的に覚醒させられると、そのエネルギーロスは致命的になります。なお、出産育児期もそうですが、冬眠期は、種類や地域、年により違いがあります。

コウモリの会のご案内

■コウモリの会は 1992 年に発足しました。コウモリ類の研究と保護を考える会です。コウモリに興味のある方は、どなたでも入会できます。

■日本には 35 種（研究者によっては 40 種）のコウモリが生息していますが、研究者が少なく、その生活ぶりや分布について不明な点が多いため、頭数は確実に減ってきています。特に森林に棲むコウモリは、種によっては現在までに数頭しか確認されていないものもあり、研究者のみならず、一般の方々からの情報もたいへん貴重なことが多くあります。

■コウモリの会では、会報『コウモリ通信』で、皆様から寄せられた情報を掲載し、数少ない情報を交換しあっています。皆様からの情報をおまちしております。ぜひお気軽にご投稿下さい。

■コウモリの会ではコウモリの生態や自然界での役割について、広く一般の方に知ってもらうことを目的に、1995 年より毎年各地で「コウモリフェスティバル」を開催しています。

■年会費は 1000 円です。

■コウモリの会の組織

顧問	吉行瑞子	(元国立科学博物館主任研究官；元東京農業大学・教授)
会長	山本輝正	(岐阜県立土岐紅陵高等学校・教諭)
副会長	松村澄子	(山口大学・理工学研究科・准教授)
評議員	安藤陽子	(東京農工大学・大学院)
	大沢啓子	(フリーライター、翻訳家)
	大沢夕志	(オオコウモリ写真家、インタープリター)
	斉藤 理	(東京都小金井市)
	佐野明	(三重県林業研究所・主幹研究員)
	中川雄三	(動物写真家)
	原田正史	(大阪市立大学・医学部・准教授)
	船越公威	(鹿児島国際大学・国際文化学部・教授)
	箕輪一博	(柏崎市立博物館・学芸員)
	向山満	(NPO法人コウモリの保護を考える会・理事長)
	吉倉智子	(筑波大学大学院)

(以上五十音順)

オブザーバー (HP 担当) 丸山健一郎 (奈良県五條市役所)

事務局長 水野昌彦 (フリーエディター)

編集委員長 三笠暁子 (ナチュラルリストクラブ)

会計監査 林 聡彦 (NPO法人コウモリの保護を考える会・理事)

一般会員 436名 (2009年2月)

■コウモリの会の連絡先

〒249-0001 神奈川県逗子市久木8-20-3 コウモリの会事務局

TEL.FAX.046-873-3677

Email:mizunobat@yahoo.co.jp 水野 昌彦

ホームページ <http://mailsrv.nara-edu.ac.jp/~maedak/bscj/>